

古墳出現期の社会と土器の移動

次 山 淳

【要約】 土器の移動は、縄文時代以来さまざまなかたちで認められる。なかでも古墳出現期の土器の移動は、須恵器出現以前の広域流通を果たしていない生産体制のもとにあつて、日本列島の各地の土器がそれぞれの様式圏を越えて広域かつ長距離に移動する点に特徴がある。さらに移動先の土器様式に大きな変化をもたらす場合も少なくない。こうした土器の移動は、人の動きや物資流通、あるいは情報の流れを反映し、古墳の出現や成立過程、また広域流通機構のありかたを考察するうえでの材料となってきた。本稿では、土器の移動から読み取られてきた古墳出現期の社会のありかたについて、土器の生産体制、畿内を中心とする入りと出の双方向の土器の移動、流通機構と集落のネットワークの観点から研究の現状について整理した。

史林 九七巻一号 二〇一四年一月

はじめに

土器の移動が、縄文時代以来どの時代にあつても、さまざまなかたちで認められることはよく知られたことである。空間規模に視点をみると、住居内・集落内での日常的なごく身近の持ち運びから、地域内での集落間の移動、さらに様式圏を越える遠距離に及ぶものまで様々である。もちろんそこには、多様な要因が背景にあり、その土器を携えた人の移動が介在する。本稿では、弥生時代から古墳時代への移行期に特徴的に認められる土器の移動現象について、そこからどのような社会のありかたが読み取られてきたのかを研究史を念頭に整理し、その現状を明らかにしていきたい。なお、

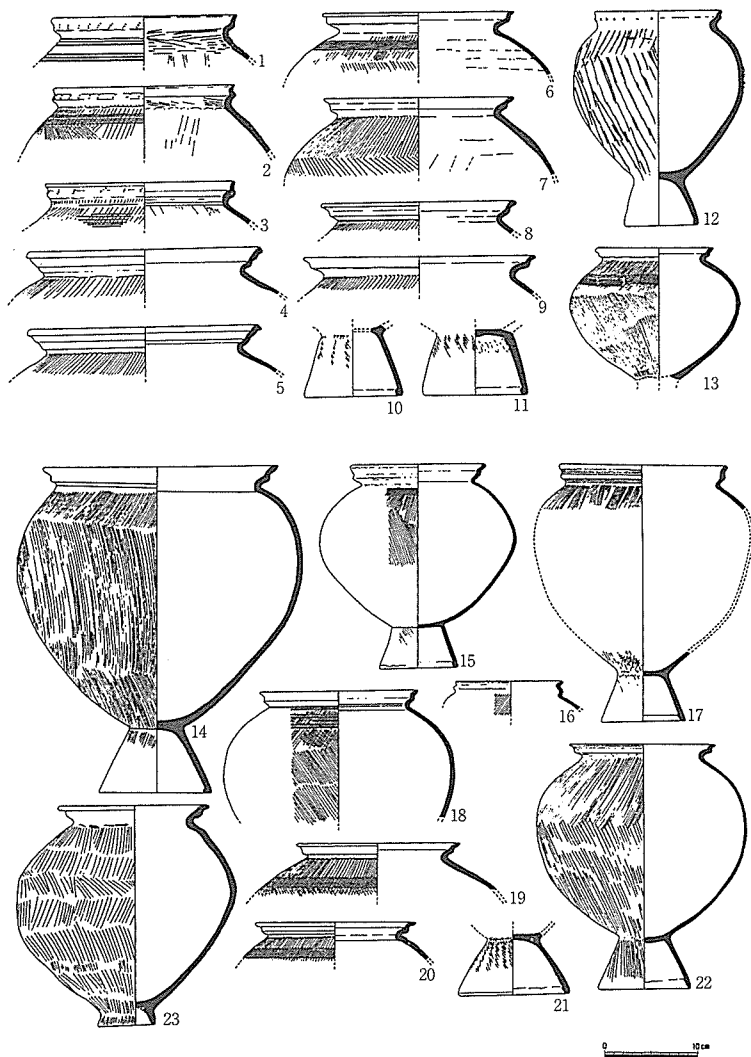
当該期の土器の移動は広く日本列島に認められるが、ここでは西日本の事例を主に扱うこととする。

西日本における古墳出現期の土器の移動の特質について整理した森岡秀人は、弥生時代後期までの移動と二つの点で大きく異なるとし、第一は、五〇〇キロメートルを越える遠隔地間で移動や直接的な影響を及ぼすようになること、第二に高率の搬入土器が認識できるようになることをあげた。^①これに加えれば、畿内など一部の地域ばかりでなく複数の地域の土器が広範囲に移動し、それを受け入れる地域も複数あること、また、出入りともに多いのが畿内であり、畿内がこの動きの中心にあったことなどもあげることができよう。

では、こうした古墳出現期の土器の移動の特質からは、どのような歴史的な意味が読み取られてきたのだろうか。

各地域で弥生土器の地域性の理解が進むなかで、一九六〇年代後半になると、具体的な土器の移動の事例に言及されるようになる。一九六八年、「弥生式土器から土師器へ」と題した論考において、大参義一は東海地方西部の弥生時代後期から古墳時代中期にいたる編年関係を整理し、特徴的な口縁部形態から「S字口縁」と名づけた甕が、関東から近畿におよぶ広域に分布することを示した（第一図）。^②この甕の型式変化のありかたと各地での出土例を対比し、その伝播の消長をあとづけたうえで、S字状口縁台付甕の拡散する「元屋敷式期」に、東海地方において畿内の形態を受け継ぐ土器が出現することから、同時期にみられる畿内および東海両地域の他地域への影響関係のありかたを、「大和政権による国家統一への胎動の前史」として考察すべき課題であるとした。こうした理解の背景には、弥生土器と古墳時代の素焼きの土器である土師器との境界を、地域性から統一的な様式への変化に求めようとする考えのあったことがうかがわれる。^③

一九七〇年を前後しておこなわれた奈良県纏向遺跡をはじめとする奈良盆地縁辺の遺跡群での発掘調査は、広域かつ多量の土器が、箸墓古墳をふくむ初期の古墳の築造されたこの地へもたらされていることを明らかにした。こうした状況を踏まえ一九七八年に、西日本の土師器を概述した西弘海は、弥生時代後期の明瞭な地域的特色をもつ在地の土器に混じって、畿内の叩き技法で作られた甕が分布すること、その範囲が北九州から関東に及ぶこと、逆に後期後半から次の終末期



第1図 東海地方と各地出土のS字状口緑台付甕（大参1968より編図）

1・3～5・7 愛知県南木戸遺跡 2・8・11・13 下渡遺跡 6・9・10 元屋敷遺跡 12 王江遺跡 14 長野県下蟹河原遺跡 15・16 山梨県西原遺跡 17 群馬県熊ノ穴遺跡 18 東京都中田遺跡 19～21 静岡県堤遺跡 22 滋賀県大清水遺跡 23 大阪府石津遺跡

（庄内式期）にかけて、東海・北陸・山陰・山陽の土器が畿内に流入し、山陽の土器が九州に、東海の土器が中部高地・関東に流入することをあげ、広範囲にわたり畿内の勢力を中心とする何らかの交渉があったことを推定した。^④ そのうえで、「古墳出現前夜におけるこの顕著な現象は、その範囲がもつとも古い古墳の分布する範囲にほぼ一致することからみても、各地域の首長墓として、巨大な前方後円墳がつくられるようになった時代——「古墳時代」の成立と無関係ではない」とした。土器に見られる活発な地域間の交流が、前方後円墳の出現に特徴づけられる古墳時代社会をもたらしした要因のひとつと考えられたのである。

他方、畿内から他地域への土器の移動が知られるようになると、古墳文化、あるいは畿内勢力の展開過程を読み取る手がかりとされた。

『魏志』に記された「倭国大乱」を、鉄をはじめとする必需物資の交易・流通機構に関わる政治的な主導権を畿内勢力が奪取する過程であると考えた岩崎卓也は、愛知県伊保遺跡や福岡県今川遺跡の土器に、在地の伝統的な土器とは全く異なる畿内の技法が孤立的におこなわれていることをあげ、畿内の勢力が要所ごとに人間の移動をとまなう拠点づくりをおこなったものとした。^⑤ さらに、畿内を中心とする人間の動きの結節点を古墳の成立と関わりの深いものにとらえ、土器にみえる畿内から北部九州への影響の強まりをこうした交易上の要請に求めている。^⑥ また、都出比呂志も、「倭国乱」の背景に、鉄の輸入経路をめぐる西日本の首長間の争い、特に北部九州地方の首長連合と畿内地方を中心とする首長連合との闘いがあった可能性を想定し、方形低墳丘墓（方形周溝墓）が北部九州において採用されることとともに、「畿内地方で発達した庄内式土器の製作技法が北部九州を含む各地の土器製作技法に影響を与えたことから判断して、この争いが畿内地方の首長連合の優位のもとに収束したと判断される。」と、この仮説を土器をもちいて補強した。^⑦

このように須恵器出現以前の広域流通を果たしていない生産体制のもとにあって、古墳出現期にみられる遠隔地間の土器の移動は、土器自体の流通品としての側面よりもむしろ、その背後にある人や集団、他の物資の流通、そしてさまざま

な情報の動きを読み取る材料としての役割を果たしてきたといえる。

以下では、土器の移動現象から読み取られてきた古墳出現期の社会のありかたについて、土器の生産体制、畿内を中心とする双方向の土器の移動（畿内への土器の移動、畿内からの土器の移動）、そして物資流通機構と集落のネットワークという観点から述べていくこととする。

なお、ある地域（様式圏）の型式学的な特徴の認められる土器が、異なる様式圏で出土する場合、これを「外来系土器」という。やや単純化していうと、外来系土器には、A 土器自体が製作地から移動したもの（搬入土器）。この場合、胎土は搬出地（製作地周辺）のものとなる。B 人が移動して、移動先で元いた場所の作り方で土器をつくるもの、C 出土した遺跡の人が模倣してつくるもの、があり、後二者の場合、その胎土は出土した遺跡、あるいはその周辺のものとなる。^⑤

- ① 森岡秀人「土師器の移動 一 西日本」『古墳時代の研究』第六巻 土師器と須恵器、雄山閣出版、一九九一年。
- ② 大参義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合——」『名古屋大学文学部研究論集XしⅦ』史学一六、名古屋大学文学部、一九六八年。
- ③ 小林行雄「後説」『弥生式土器集成図録 正編』東京考古学会、一九三九年。
- ④ 西 弘海「西日本の土師器」『世界陶磁全集』二、日本古代、小学館、一九七八年。
- ⑤ 岩崎卓也「古墳と地域社会」『日本考古学を学ぶ』三 原始・古代の社会、有斐閣、一九七九年。
- ⑥ 岩崎卓也「古墳出現期の一考察」『中部高地の考古学Ⅲ』長野県考古学会、一九八四年。
- ⑦ 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」『日本史研究』第三四三号、日本史研究会、一九九一年。
- ⑧ 今村啓爾「異系統土器の出会い——土器研究の可能性を求めて——」『異系統土器の出会い』同成社、二〇一一年。

一 土器の生産体制と移動

土器の移動を考えるうえで、当該期の土器の生産体制について確認しておこう。

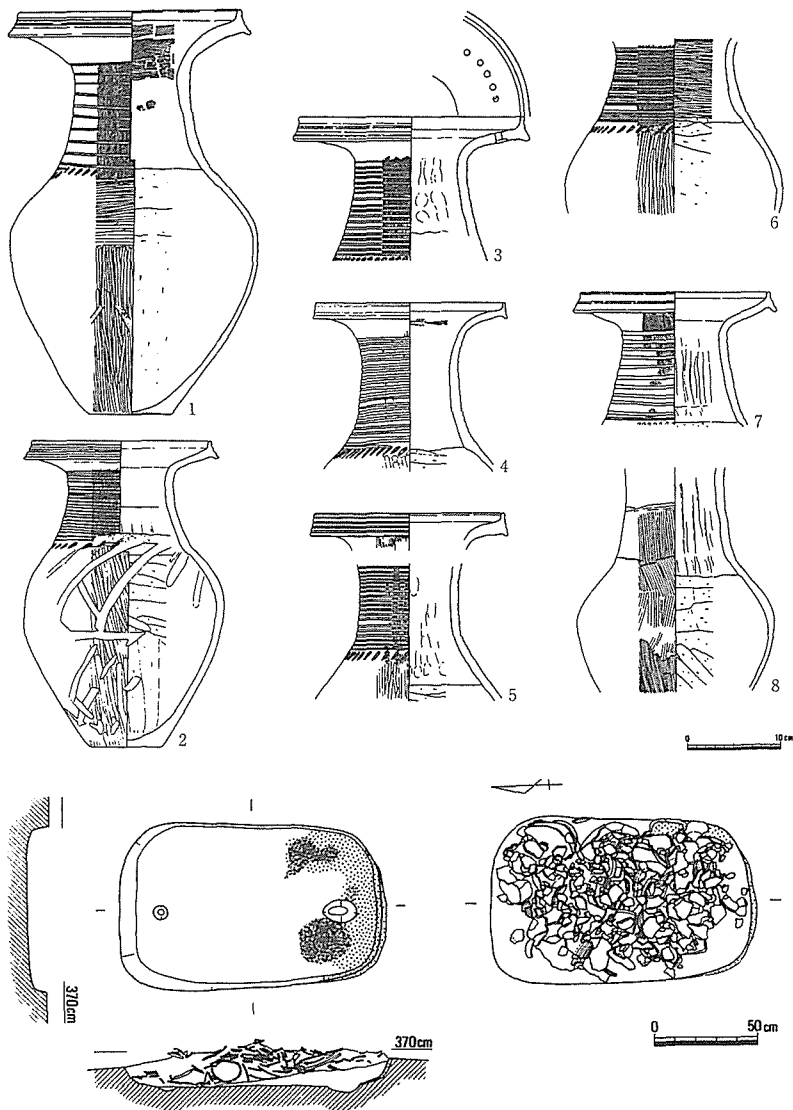
「専門的でなく、ロクロも使用しない土器」を「原始土器」とよんだ都出比呂志は、^①後にこの用語を再整理し、「ロク

口を使用せず、專業的でない土器を自家消費を主な目的とする土器という意味で仮にドメスティック domestic な土器」と呼ぶことを提唱した^②。そこには、土器作りの技法そのものが製作者の所属する共同体から規制を受け、技法のみならず施文についても、所属する集団の個性が現れやすく、ある意味では「集団の表象となりうる」土器という意味がこめられている。都出は、縄文・弥生土器などの「原始土器」を含み、かつ専業生産でない一部の土師器をも包括する概念として、自家需要、自家消費のために作られたという意味で、「ドメスティックな土器」「自家生産土器」「自給土器」の用語を用いるとする。また、古墳時代以降の土師器において、自家需要のための集落ごとの生産と専業者による生産とが、どのような比率で共存しあっているのかということを解明すべき課題としてあげた。

弥生時代後期に集落単位の自給的な土器生産がおこなわれていたことは、岡山県百間川原尾島遺跡での土器焼成遺構と焼成時破損品のありかたから、宇垣匡雅によって次のように説明されている^③。この遺跡では、弥生時代後期（百間川遺跡の時期区分による後Ⅰ～Ⅲ期、Ⅳ期については不明確）を通じて焼成時破損品が認められ、後Ⅲ期には焼成遺構と考えられる土坑が検出されている（第二図）。一方、原尾島遺跡の東二キロメートルに位置する百間川兼基・今谷遺跡において、原尾島遺跡の焼成遺構と同時期（後Ⅲ期）の焼成破損品とみてよい長頸壺が出土した。このことから二つの集落では、この時期それぞれに土器の生産がおこなわれていたと考えられる。また、焼成遺構の中から出土した長頸壺は製作手法の違いから四種に区分された（第二図A～D）。これを製作者による差と読み取り、土器製作は集落内の各世帯でなされ、焼成は共同作業であったと推定する。

さらに、焼成時破損品が弥生時代終末期になると認められなくなることから、他集団によって製作された土器を入手し使用するようになったため、原尾島遺跡での生産が減少したものとし、その理由をこの時期から盛行し、強い規格性と調整の斉一性の認められる「吉備形甕」（第六図）の生産と供給に求めた^④。

弥生時代後期から終末期にかけて、集落単位の土器生産に、「吉備形甕」のような地域内での分業にもとづく集約的な



第2図 岡山県百間川原尾高遺跡の土器焼成遺構と長頸壺(岡山県教委1994より編図)

A (1・2 頸部内面ヨコハケ) B (3～5 同ナデ) C (6 同ヨコミガキ) D (7・8 同シボリ)

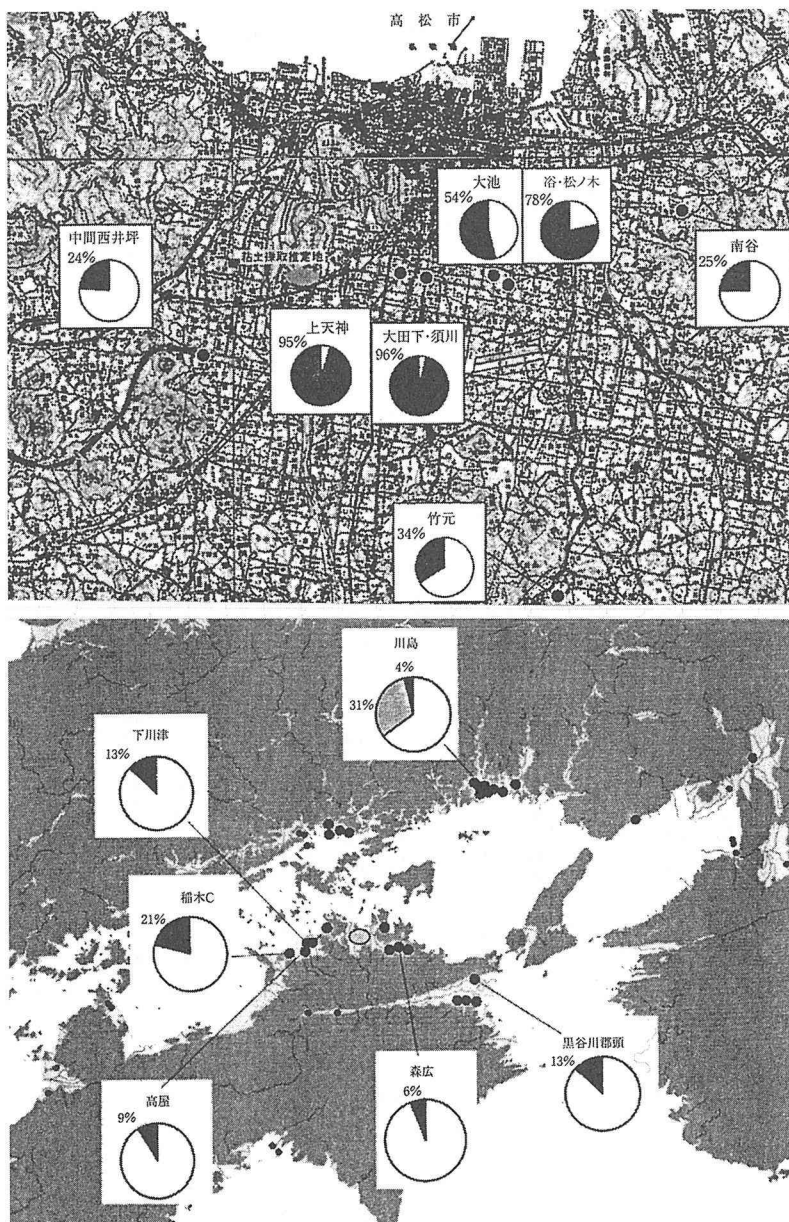
生産による製品の加わった重層的なありかたが、西日本のいくつかの地域で確認されている。複数の器種を生産するものとして、讃岐の「香東川下流域産土器（下川津B類土器）」^⑤、阿波の「東阿波型土器」と呼ばれる土器群が、また限られた器種を生産するものとして、河内の「河内形庄内形甕」、大和の「大和形庄内形甕」がこれにあたる。^⑦

これらの土器は、胎土、色調、器壁の薄さに代表される上製の製作技術、器形などの特徴によって搬入土器として識別されてきたが、近年では、素地粘土あるいは混和材の採取地、製作の時期と変遷、型式学的特徴（形態・製作技術）、器種構成、遺跡内における地場生産の土器との比率による製作地と供給範囲、供給量などが検討され、主要供給圏内での移動とその外部への移動のありかたが、それぞれ理解されるようになってきた。さらに、製作地での生産単位は必ずしも一箇所とは限らず、またこうした上製の土器群の模倣による二次的な生産がおこなわれるなど、より複雑な地域構造が解明されつつある。一方、様式圏外への移動については、移動のルート、搬出量の時系列的な変化や地域差、移動の方向性などの視点から検討が加えられ、地域間の関係を探る手がかりとなっている。

讃岐地域の香東川下流域産土器を例に、その空間的な構造をみていこう（第三図）。この土器は、高松平野中央部の香東川下流域で製作され、石清尾山西南麓が素地粘土の採取地と推測されている。^⑧角閃石の細粒を多量に含み、灰褐色から暗橙色を呈する胎土を特徴とする。^⑨

この粘土を使用した土器生産は、弥生時代後期初頭に開始され、採取推定地に近い上天神遺跡、大田下・須川遺跡では、後期を通じて出土土器の大部分をこの種の土器が占め、この範囲を主要な供給圏とする。約二・五〜三キロメートル東にはなれた大池遺跡、浴・松ノ木遺跡などでは三〜七割となり、平野の縁辺部では二〜三割まで低下する。出土量には遺跡差があり、必ずしも製作地からの距離に応じて同心円状に移動量が遞減するものではないとの指摘も、地域内での遺跡間関係を復元するうえで重要である。

隣接する阿波や、瀬戸内海を挟んだ対岸の播磨・備前地域、四国北岸に沿った伊予への移動も一定量があり、これらの



第3図 香東川下流域産土器の主要供給圏と域外主要搬出先（大久保2003）

地域では在地製作もおこなわれている。後期後葉段階になると、技術基盤の移転により吉野川下流域で「東阿波型土器」の製作がはじまる。兵庫県川島遺跡二〇溝では、全体の四〇%におよぶ讃岐の形態の土器が認められるが、搬入品は四%である。^⑫

伊予の今治・松山両平野では、搬入品と在地製作品が存在し、特に多種多量に出土する限られた遺跡と、少数出土の遺跡がある。前者には他の地域の外来系土器も多いという傾向があり、中心集落と後背集落の関係が読み取られている。さらにこの地域では技術の継続性と定着性に乏しく様式的な影響関係はない。

遠隔地への移動をみると、西方では備後、安芸、筑前などに出土例が知られており、^⑬ 東方では河内、摂津、和泉、そして大和での出土がある。^⑭

製作地からの搬出形態にもとづいて空間的な構造を整理すると、製作地と主要供給圏、その周辺に何段階かの供給圏の関係があり、この範囲がおおむね様式圏と一致する。その外縁部に対して隣接地域への移動、さらに遠隔地移動というありかたが理解される。

また伊予では、香東川下流域の特徴を示すものと在地の胎土のもの以外に、第三の胎土とも言える製品の搬入が指摘されており、^⑮ 様式圏内の二次的な製作単位による土器が移動することも考慮する必要がある。

こうした製作単位の複数化は、吉備形甕においても知られている。吉備南部では、備中の足守川流域が吉備形甕の一次的な製作地と考えられており、備前地域への搬出も認められる。^⑯ 一方で備前地域産の吉備形甕のあることも指摘されており、^⑰ 製作単位の分化がうかがわれる。すなわち、「備中形（産 吉備形）」と「備前形（産 吉備形）」があることになる。このことは、他地域での搬入品についても、胎土の相違の認められたものの再検討を促すとともに、これらを識別することにより、例えば「吉備系」としていたものを「備中系」と「備前系」に区別するなど、より細別された地域（製作単位）との関係を明らかにすることのできる可能性を示唆している。

以上に述べてきたような特定の製作単位は、香東川下流域産土器のように在来の弥生土器生産の中から特化して成立する場合と、東阿波型土器のように生産体制も含めたかたちでの技術移転により成立する場合があり、こうした生産体制の成立と、その体制を支える技術基盤の移転が、古墳出現期の土器の移動のありかたを理解するうえで重要な視点となつてきている。

- ① 都出比呂志「原始土器と女性」『日本女性史』第一巻 原始・古代、東京大学出版会、一九八二年。
- ② 都出比呂志「日本農耕社会の成立過程」岩波書店、一九八九年、二九・二九二頁。
- ③ 宇垣匡雅「土城Ⅰについて」『百間川原尾島遺跡Ⅲ 旭川放水路（百間川）改修事に伴う発掘調査Ⅹ 岡山県埋蔵文化財発掘調査報告八八、岡山県教育委員会他、一九九四年。宇垣匡雅「弥生土器の焼成坑——百間川原尾島遺跡検出例について——」『古代の土師器生産と焼成遺構』真陽社、一九九七年。
- ④ 河合 忍「吉備南部弥生時代後期から終末期における土器生産について——岡山市百間川原尾島遺跡出土土器の検討を通して——」『みずほ別冊 弥生研究の群像——七田忠昭・森岡秀人・松本岩雄・深澤芳樹さん還暦記念——』大和弥生文化の会、二〇一三年。
- ⑤ 大久保徹也「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社、二〇〇三年。従来の下川津B類土器は、香東川下流域産土器のうち、後期中葉〜古墳時代初頭の段階のものとする（大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅵ 下川津遺跡』香川県教育委員会他、一九九〇年）。以下、特に断りの無い限り香東川下流域産土器についての記述は、上記文献および以下の文献にもとづいている。大嶋和則「伝統的交易圏の解体」『香川考古』第五号、香川考古刊行会、一九九六年。大嶋和則「高松平野の集落間における庄内併行期の土器相——いわゆる下川津B類土器の製作について——」『続文化財学論集』水野正好先生古稀記念論文集 第一分冊、文化財学論集刊行会、二〇〇三年。
- ⑥ 栗林誠治「四国島出土の東阿波型土器」『真珠』第四号、徳島県埋蔵文化財研究会、二〇〇四年。
- ⑦ 田中元浩「畿内地域における古墳時代初頭土器群の成立と展開」『日本考古学』第二〇号、日本考古学協会、二〇〇五年。
- ⑧ 森下友子「胎土Ⅰ類土器について」『太田下・須川遺跡』高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第四冊 香川県教育委員会他、一九九五年。
- ⑨ 偏光顕微鏡による岩石鉱物の同定および相対的な含有量比、およびX線回折法・蛍光X線分析法による元素含有率の分析がなされている（清水芳裕「中間西井坪遺跡出土土器の胎土の特徴と材料の検討」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告第三十二冊 中間西井坪遺跡Ⅱ 本文編』香川県教育委員会他、一九九九年）。
- ⑩ 大嶋和則「高松平野の集落間における庄内併行期の土器相——いわゆる下川津B類土器の製作について——」（前掲註⑤）。
- ⑪ 梅本謙一「西部瀬戸内地方における庄内期東四国系土器の検討」『考古論集』河瀬正利先生退官記念論集、二〇〇四年。梅本謙一「松山市若草町遺跡出土の庄内期東四国系土器の検討」『地域と古文化』

同刊行会、二〇〇四年。

- ⑫ 太子町教育委員会『川島・立岡遺跡』一九七一年。大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」

(前掲註⑤)

- ⑬ 広島県立歴史民俗資料館『西と東の弥生土器 卑弥呼の時代の安芸・備後』二〇〇三年、九頁。福岡市教育委員会『博多四一——博多遺跡群第七〇次発掘調査報告——』福岡市埋蔵文化財調査報告書第三七〇集、一九九四年、一〇六頁。

- ⑭ 山田隆一「大阪府出土の讃岐・阿波・播磨系土器」『邪馬台国時代の阿波・讃岐・播磨と大和』ふたかみ邪馬台国シンポジウム六資料集、香芝市教育委員会他、二〇〇六年。川部浩司「古墳時代開始期におけ

二 纏向遺跡への土器の移動とその解釈

次に、畿内への土器の移動の例として奈良県纏向遺跡をとりあげ、土器の移動をめぐる諸説についてみていこう。

一九六八年、奈良県佐紀遺跡（平城宮跡）の調査で、自然流路出土土器の中に東海地方のS字状口縁台付甕が多数存在することが明らかにされた。^①報告者である安達厚三は、「東日本的なS字状口縁土器が多数存在することは、畿内においては新しい事実」であるとその重要性を指摘した。

さらに一九七一年からおこなわれた奈良県纏向遺跡辻地区・東田地区の発掘調査では、基幹水路（大溝）、土坑群、旧河道および纏向石塚古墳・矢塚古墳の周濠から、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器が多量に出土し、このなかに東海・瀬戸内・山陰地域の特徴をもつ土器のあることが報じられた。^②

佐紀遺跡、纏向遺跡など奈良盆地の北辺から東辺にかけて所在する古墳群に隣接する同時期の集落遺跡でのこうした成果をふまえ、奈良県布留遺跡山口池地区での層位的出土資料を検討した置田雅昭は、明らかな搬入品よりもむしろ各地の

る大和地域と四国北東部地域の地域間交流——大和地域出土の四国北東部地域産・系土器の集成とその性格をめぐる基礎的研究——」『研究紀要』第一六集、（財）由良大和古代文化研究協会、二〇一二年。

- ⑮ 梅木謙一「松山市若草町遺跡出土の庄内期東四国系土器の検討」

(前掲註⑪)。

- ⑯ 河合 忍「吉備南部弥生時代後期から終末期における土器生産について——岡山市百間川原尾島遺跡出土土器の検討を通して——」(前掲註④)

- ⑰ 亀山行雄「吉備の外來系土器」『邪馬台国時代の吉備と大和』シンポジウム資料集、香芝市教育委員会他、二〇〇二年。

影響の見られる資料の多いことに着目した。^③その上で「大和における古式土師器に、このような各地の土器の影響が認められることは単にそれらの地域が大和の交易圏内にあったというだけでなく、大和における多数の前期古墳の存在と関連しているようにおもわれる。」とし、大和において古墳を築造するにあたり、東海などの各地から使役のために駆り出された人々が、その土地の土器を携えて往来し、土器の器形や製作手法を伝えたことを想定した。

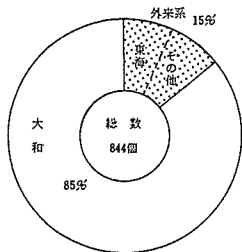
一九七六年には、纏向遺跡第一～七次調査の正式な発掘調査報告書が刊行された（以下、『纏向』とする）。^④『纏向』では、弥生時代終末期から古墳時代前期にかけての土器が纏向1式～4式に様式区分されたが、そのほぼ全期間を通じて、外来系土器の出土が認められている。西部瀬戸内、吉備、山陰、播磨、^⑤紀伊、河内、近江、北陸、東海（尾張・駿河）、南関東といった広範な地域の土器が識別され、各時期における外来系土器のありかた、それぞれの地域と畿内との併行関係が検討された。^⑥

外来系土器を検討した関川尚功は、纏向1式～纏向3式までの土器八四四点について、①総数に対する外来系土器の比率、②外来系土器における各系統の比率、③外来系土器における器種組成の比率の三点から分析をおこない、それぞれの項目について時系列的な変化をとらえた（第四図）^⑦。

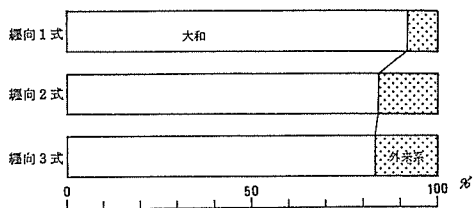
その結果、①外来系土器が出土土器全体に占める比率は、ほぼ一五％であり、少なく見積もっても一〇％を下ることがない（第四図1）。時間を追って確実に増加しており、増加のピークは、纏向3式期にある（同2）。②地域では、東海系土器が外来系土器の半数以上を占め、山陰・北陸、河内、吉備の順で続く（同3）。そのなかで関東系土器が確実に増加傾向にある（同4）。③器種についてみると、甕と壺で外来系土器のほぼ八〇％を占め、甕は全体の六〇％におよぶ（同5）。時期別にみても甕の占める比率は確実に増加する（同6）。という状況が読み取られている。

量的に保証され、かつ時間的な変化を追うことのできる資料に恵まれたこの分析は、一遺跡での分析手法として、その後の外来系土器の遺跡内分析の基礎をなした。

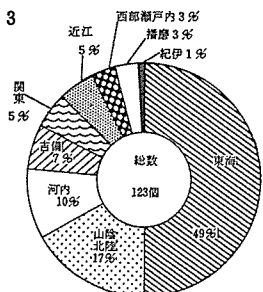
1



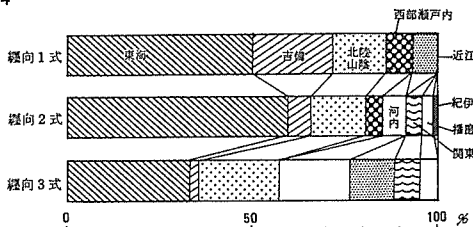
2



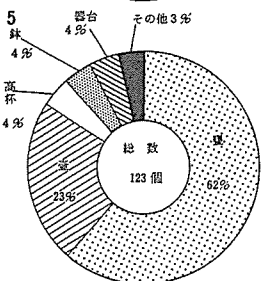
3



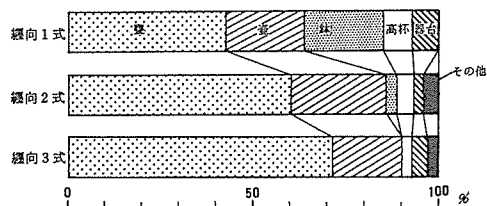
4



5



6



第4図 纏向遺跡出土外来系土器の比率 (関川1976)

関川は、その考察において、外来系土器の出土は畿内各地の同時期の遺跡にも認められるとしながらも、古墳時代前期の全期間を通じて外来系土器が認められること、出土量が豊富でその範囲が西部瀬戸内から南関東にまでおよぶという纏向遺跡の外来系土器の全体的な特徴をあげた。外来系土器には、搬入品と大和で製作された可能性の高いものがあり、製作者の移動が読み取れるとしたうえで、台付甕と土製支脚に着目して、出身地の食生活様式が堅持されるという観点からこれを補強するとともに、こうした現象は畿内以外でもある程度認められるとし、古墳築造従事者という置田雅昭

の説に対する都出比呂志の反論^⑤にある程度の余地を認めながらも、古墳ばかりでなく水路の構築など各種の土木工事への動員を示唆した。また、大和（あるいは畿内）から畿外の地域へ運ばれる例は多くないとし、畿内への一方的な流入といった移動の不均等性のある可能性にふれている。

さらに、広範な人々を含む人的移動の階層について、都月型、山陰型埴輪の出土をあげ、纏向1式後半以降に顕著になる地域間交流が、各地域集団の一般構成員だけでなく、首長層との関わりを含むものであったとし、纏向4式（布留1式）期の布留式土器と大型前方後円墳の波及の基盤の一端を担うものであったとした。

以上のような『纏向』に示された事実関係にもとづいて、纏向遺跡での土器移動についてはその後も多くの解釈が示された。

春成秀爾は、大和で製作された外来系土器の存在から、弥生時代終末期には大和と遠隔地諸集団の関係が、大和への人間の移動を含むものであったとし、中国王朝に対する生口の献上を例に、「大和盆地における他地方土器型式の検出は、こうした背景のもとで評価すべきであって、それは大和盆地へ他地方の人々が一時的な移動だけでなく、在地の集団関係から切りはなされて生口、奴婢などの形態をとって強制移動させられている可能性をも示唆するものである。」とした^⑥。

続けて、「大和盆地に群在する初期の大型古墳の存在から、それらの古墳の造営に投下されたとする意見もあるが、現状では最古の前方後円墳の年代よりも一定量をもつ搬入土器の年代の方が古い。もともと、石塚のように、搬入土器と同時期に造られた墳丘墓もないわけではないが、それとても他地方から土器をもたらした人たちの労働力として結びつけないとも造営可能である。むしろ、それらの人々は大和盆地における開発へ投入されたとみるのが妥当であろう。大和部族同盟と各地首長との間に成立しているかかると関係が、しばらくして前方後円墳の築造が開始されると今度は各地集団からそれにも参集・投入させられることになったのであろう。（中略）大和への搬入土器の中には、おそらく地方の各種特産物の献上と関係するものも含まれているであろうが、古墳築造に数ヶ年かかるとすれば、それらの土器には、移入者が

持参したもの、移入先で製作したもののほか、出身集団が恒常的に調達していたものも含まれている可能性も考えられる。」と述べている。

寺沢薫は、河内・摂津など近隣地域でみられる高率の搬入土器の存在は、弥生時代中期からみられた社会的状況である一方で、大和では弥生時代を通じて搬入土器が一割を越えることはなく、纏向遺跡における土器の搬入率がきわめて高いことを指摘し、庄内式土器にみられる搬入・搬出関係や、この時期における搬入率の増加傾向を、弥生時代以来の集団関係と土器組成上の補完関係といった地域の社会的分業の発展として捉えることは、纏向遺跡に関してはあたらないとした。さらに、搬入の対象地域の広さを指摘し、このように汎日本的な搬入対象地域を有する背景は、地域の集団関係や分業論上の交易品では解決できないと遺跡の特殊性を強調した。そして、「纏向遺跡に多量の土器がもたらされた背景を、より政治的な意図のもとに行われた集団の移動の歴史的な端緒とみることは不可能ではないとし、入貢や出仕などの結果や市を媒介とした土器の移動を想定する。

穴澤啄光は、広範囲の搬入土器の出土から纏向遺跡への労働力と物資の集積を想定し、「このような政治的中心地に市場が設けられていて、物資の交易がおこなわれていたことも当然考えられるが、支配者の儀式、饗宴、宮殿・墳墓・灌漑施設などの機会に行われる貯蔵物資の大々的放出による再分配が行われていた可能性も決して否定できない。」としたうえで、「纏向遺跡は当時の日本国内の流通機構の要め」であったことを示唆した。^⑪

このように、外来系土器のありかたにもとづいた纏向遺跡の評価は多様である。近年、纏向遺跡の外来系土器については、出土量の多さと、きわめて広範囲からの移動であることの二点のみに言及されることが多い。置田雅昭や春成秀爾が問題としたのは、むしろ大和で製作された外来系土器の存在であった。これらの製作者の性格についてはさらに検討を要するが、一般に来訪者による在地での製作と考えられている。特に比率の高い東海系S字状口縁台付甕の場合、移動量の多さに対して大和の土器様式のなかに受容されることがなく付加的な存在であることと、弥生時代終末期から古墳時代前

期にかけて外来系土器における甕の比率が高まることも注意しなければならない。^⑬

これに関連して、纏向遺跡の南約三・六キロメートルに位置する奈良県城島遺跡の調査成果が参考になる。この遺跡では、鍬・鋤・天秤棒といった土木工事に関わる多量の木製品が出土した。共伴した出土土器に大和のものは少なく、東海系を中心に北陸・山陰系の土器が主体を占め、これらはほとんどが甕で、しかも口径三〇センチメートル前後の大型品が主体であった。^⑭このような遺跡のありかたを、報告者の清水真一は「飯場的施設」と表現している。また、曲柄鍬の検討からも東海系統のものが含まれていることが指摘されており、「使い慣れた土木具」の使用があつたことをうかがわせている。^⑮城島遺跡の事例は、外来系土器が必ずしも交易活動や物資の流通を反映したものばかりではなく、実際に土木工事に関わる人とモノの動きのあつたことを示している。

纏向遺跡は東西約二キロメートル、南北約一・五キロメートルの広大な遺跡であり、遺跡の内部がさまざまに機能分化していたことが想定される。外来系土器の内容も、それぞれの場の性格に応じたありかたを示すものと考えられる。また、近年の成果では、時期によつて遺跡内での中心域が移動していることも指摘されている。^⑯したがって、地点によつては時期的な傾向も反映されることが考えられる。纏向遺跡の外来系土器については、さらに多角的な検討が必要となつてこよう。

- ① 安達厚三「第四次調査第二次朝堂院東朝集殿地域・II古墳時代溝出土の遺物」『奈良国立文化財研究所年報一九六九』奈良国立文化財研究所、一九六九年。本資料については、一九八一年に正式報告書が出版されている（奈良国立文化財研究所『平城宮発掘調査報告X』奈良国立文化財研究所学報第三九冊、一九八一年）。
- ② 石野博信「古代纏向川」の調査「青陵」一九、奈良県立橿原考古学研究所、一九七二年。石野博信「奈良県纏向（まきむく）遺跡の調査——三輪山麓における古墳時代前期集落の問題——」『古代学研究』第六五号、古代学研究会、一九七二年。
- ③ 畠田雅昭「大和における古式土師器の実態——天理市布留遺跡出土資料——」『古代文化』第二六巻第二号、古代学協会、一九七四年。
- ④ 奈良県立橿原考古学研究所編「纏向」桜井市教育委員会、一九七六年。本書は、第五版まで出版されている（一九九九年）。第五版は、豊岡早之による大溝出土土器の再検討を受けて出版されたもので、その成果は別冊の『補遺篇』にまとめられている。また、この調査の出土土器のうち橿原考古学研究所附属博物館保管分については再整理が行われた（『大和考古資料目録』第一八集 纏向遺跡資料（二）、奈良県立橿原考古学研究所附属博物館、一九九一年）。

⑤ 播磨系とされた土器については、この当時の認識として、前述の兵庫県川島遺跡二〇溝において、出土土器の四〇%を占めB型土器群とされた讃岐系土器のありかたにもとづいて判断されているため、実際は讃岐・阿波系とすべきものである。太子町教育委員会「川島・立岡遺跡」一九七一年。

⑥ 石野博信「古式土師器の併行関係」『纏向』桜井市教育委員会、一九七六年。

⑦ 関川尚功「土器の移動に関する問題」『纏向』桜井市教育委員会、一九七六年。

⑧ 都出比呂志「古墳出現前夜の集団関係」『考古学研究』第二〇巻第四号、考古学研究会、一九七四年、三七頁。

⑨ 春成秀爾「前方後円墳論」『東アジア世界における日本古代史講座』第二巻、倭国の形成と古墳文化、学生社、一九八四年。

⑩ 寺沢 薫「纏向遺跡と初期ヤマト政権」『橿原考古学研究所論集 第六』吉川弘文館、一九八四年。

三 畿内系土器の西日本への移動

一方的流入と理解された畿内地域の土器についても、一九八〇年代に入ると北部九州の事例に加え、瀬戸内海沿岸の広島県神辺御領遺跡^⑪、愛媛県宮前川遺跡など西日本の各地で出土例が増加し、集成作業にもとづく体系的な検討がなされるようになった。

阿部嗣治は、庄内形甕七七例について、胎土中に多量の角閃石・雲母を含み暗褐色を呈する生駒西麓産の河内形甕と、これを技法のうえで模倣製作したものに大きく分け、それぞれの分布形態を検討した（第五図）^⑫。河内形甕は分布形態に二種類があり、ひとつは広域のもので滋賀県東部、福井県西部、和歌山県北部、山陰東部、福岡県東部をそれぞれ分布の限

⑪ 穴澤咏光「三角縁神獣鏡と威信財システム（上）」『潮流』第四報、いわき地域学会、一九八五年。

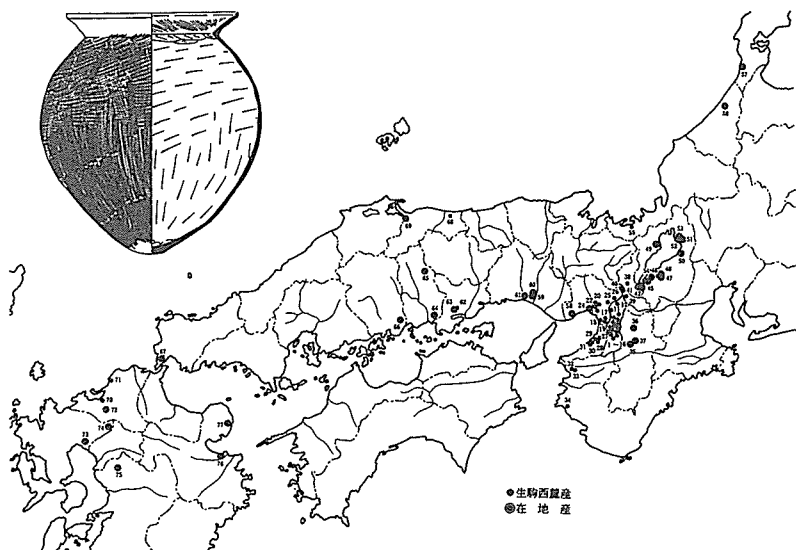
⑫ 春成秀爾「研究報告についての討議」における発言（『考古学研究』第四三巻第三号、一九九六年、五九頁）。

⑬ 桜井市教育委員会「城島遺跡外山下田地区発掘調査報告書」一九九一年。清水真一「城島遺跡出土の木製品のもつ意義」『光陰如矢』萩田昭次先生古稀記念論集、「光陰如矢」刊行会、一九九九年。

⑭ 当該期の甕の容量と城島遺跡の特異性については小田木治太郎の分析がある（『甕形土器の容量——弥生形・庄内形・布留形——」『古墳文化とその伝統』西谷真治先生古稀記念論文集、西谷真治先生の古稀をお祝する会、一九九五年）。

⑮ 樋上 昇「木製品から考える地域社会——弥生から古墳へ——」雄山閣、二〇一〇年。

⑯ 桜井市立埋蔵文化財センター「ヤマト王権はいかにして始まったか——王権成立の地 纏向」二〇〇七年。



第5図 庄内形甕の分布と河内形（生駒西麓産）庄内形甕（阿部1985より編図）

土器実測図は、大阪府安満遺跡出土（1/8）

界とする。出土した遺跡をつなぐことで、各遺跡へのルートについても言及している。また、河内の周辺部では、弥生時代に生駒西麓産土器が搬出された地域にあたる摂津・和泉での量的な多さを指摘し、大和では大和形甕の生産により河内形甕の出土は少ないとする。模倣品の分布については、四国、南九州を除く西日本一帯と北陸にあり、河内よりも遠隔地になるほど出土数が増えることを指摘した。

以上のことから、庄内形甕の分布の特徴として、他の地域の土器に比べて分布圏の広さ、搬出量の多さ、技法の伝播をあげ、河内形庄内形甕を各地の拠点集落が受け入れ、周辺集落へ技法が伝播し、在地産の庄内形甕が生み出されるという図式を読み取った。さらに、このようにして庄内形甕を受け入れ製作した地域が、他地域に先駆けて次段階の布留式土器を受け入れるものとした。

寺沢薫は、布留0式段階（古墳時代前期初頭）の畿内系土器の分布を検討し、その拡散状況と併行資料の関係を体系的に整理した^④。畿内系の様式の移入のありかたから「北九州型」「北陸・山陰型」「瀬戸内型」「東方形型」「辺境型」の五類型を読み取っている。

また、西日本にみられる庄内形甕の大多数が、布留0式期の所産であることを指摘し、庄内形甕の方が布留式土器に比べて分布域が広い一方で、布留式土器のように多量の甕がともなうことや、セツト関係が保持されることがないことから、庄内形甕の展開はむしろ社会経済的背景のあるものとした。そして、布留式土器を携えて居住した集団、あるいはそれを大量に搬入ないし製作した集団の性格を、政権中枢やその中継的地域との社会的関係の表徴として把握する必要性があるとし、このような土器の展開を、「初期ヤマト政権」の政治的・祭祀的伸張の実存姿態として捉えることを主張する。

こうした畿内系土器の遠隔地移動を視点とした研究に対し、受け入れ側の地域を対象とした検討では、在来系土器と外来系土器の関係性の分析から、地域内での受容のプロセスや集団の動向を捉えようとする作業が蓄積された。特に北部九州では、博多湾から有明海にいたる広い範囲で土器様式の畿内化という現象が認められ、「はじめに」でふれたように、北部九州の対外的な門戸という立地とも重なって、畿内集団の進出と結びつけて考えられることも多い。

田崎博之は、編年作業において在地系・外来系・折衷形といった系統的な弁別作業をおこない、弥生時代後期からの在来形式の変化を軸として、外来系土器の動向を時系列的に捉えた^⑤。さらに、細分された地域において、それぞれの傾向を読み取ること、地域内での小地域、あるいは遺跡の性格づけを外来系土器の受容の差という視点からおこなった。その結果、小平野単位や集落規模の差異よりも、経済的な基盤の異なる海岸部の集落と内陸部の集落の差異が明瞭であること指摘している。例えば、早良平野の東北部、博多湾に面した古砂丘上に立地する西新町遺跡では、集落の経済基盤を立地と、イイダコ壺・外来系土器などの出土遺物から、漁撈活動と海上交易活動と考え、外来系土器の増加傾向とその主体が近畿地方系土器にあることから、外来系土器の流入過程の背景を、近畿地方の勢力が海上交易権を掌握する過程であると想定した。一方、内陸部の集落では、近畿地方系統の小型鉢や器台など祭祀的な性格をもつ器種の受容が集落内の一部の住居に限られることから、限られた一部（首長層？）が近畿地方を中心とする外来の祭祀権と結びつく過程と考えている。

溝口孝司は、各遺跡での土器の構成を在地系・外来系・変容土器のありかたにより類型化したうえで、それが各遺跡単

位の土器製作者が保有した範型の内容に近いものとし、各類型を構成する集団の性格を考察した^⑥。在地系が卓越するA類型は外来系土器に関する情報を範型に受容しない在地人集団、在地系・外来系・変容土器が共存するB類型は、外来系土器の範型を保持する移入者集団と在地系土器の範型を保持する在地人集団の混在、変容土器が外来系土器群に混在するC類型は、外来系土器に関する情報を範型に積極的に受容し、ほぼ外来系土器を製作する範型を成立させた在地人集団と移入者の混合集団、畿内系土器のみに占められるD類型は、畿内地方の土器に関する範型を忠実に保持する移入者集団、とする。なお、溝口は外来系土器のほとんどが搬入品で占められる場合、あるいは半専門的な集団により在地で生産され、各集落に流通する場合については、在地産の外来系土器の存在や集落ごとにみられる外来系土器の差異を説明できないとしてその可能性を却けている。

各類型の集落は、それぞれ準海岸部・内陸部(A類)、海岸部あるいは内陸奥部(B類)、内陸部(C類)、海岸部の限定された地域(D類)に立地し、D類に拠点的な性格、B類に港湾集落、A・C集落に「閉鎖的」「開放的」という階層差を読み取る。そして、このような遺跡間の相違の要因を、移入者の目的的な侵入と在地集団の対応の相違に求めた。

特に移動の顕著な畿内系土器に着目した井上裕弘は、これらをさらに技術系統にもとづいて「伝統的第V様式系」、「庄内系」、「布留系」に区分し、それぞれの受容の时期的なありかたを検討した^⑦。また、北部九州でみられる布留形甕について、畿内からの搬入ばかりでなく北部九州での製作を示唆した。畿内系土器が出土土器の大半を占める遺構、遺跡のありかたを移住者集落と考えている。

久住猛雄は、当該期の土器を在来系(A系統)と、畿内系の伝統的V様式系(B系統)・庄内式系(C系統)・布留式系(D系統)に区分し、畿内系土器(B・C・D系統)のありかたに着目して編年関係を整理した^⑧。庄内形甕の中に在地生産された特徴的な一群のあることを指摘し、従来は大和形とされることのあったグループを型式学的な特徴を詳述した上で「筑前型」庄内形甕とし、大和形との関係を読み取った。そして、比恵・那珂遺跡群(雀居遺跡なども含む可能性あり)な

いし博多遺跡群周辺（堅粕遺跡なども含む可能性あり）で生産・搬出されたものとした。一方、筑後地方には河内形庄内形甕の影響のあるものが存在するとしてこれを「筑後型」と仮称し、さらに、「北部九州型布留型甕」を提唱している。

そして、北部九州地域にみられる畿内系土器主体への様式変化と展開が、地域内での生産と流通の側面の強いものであることを主張した。すなわち、「畿内系」土器群の北部九州での展開は、福岡平野中樞部（比恵・那珂遺跡群、博多遺跡群）において、「畿内」と特殊な（政治的な）情報の共有を背景に、工人集団を移植することにより半ば独自に生成・進化したものとし、北部九州各地への波及は、各地の首長層が福岡平野の勢力との関係から受容し、在地に広がる場合のあること、前代の遺跡の希薄な地域に突然「畿内系」土器を主体的にもつ集落が出現する場合も「福岡平野系」集団である可能性を示唆した。

筑前地域での庄内形甕の成立にあたり、生産と流通に関わる技術移転が、供給圏がきわめて狭いとされた大和形甕、さらには「大和」との関係において成立したことの指摘は、今後、畿内系土器の受容過程の検討を進めるうえでの重要な視点となる。

- ① 広島県教育委員会・（財）広島県埋蔵文化財センター『神辺御領道跡——国鉄井原線建設に係る発掘調査報告——』一九八一年。
- ② （財）愛媛県埋蔵文化財センター『宮前川遺跡——中小河川改修事業埋蔵文化財調査報告書——』埋蔵文化財発掘調査報告書第一八集、一九八六年。
- ③ 阿部嗣治「土器の移動に関する一考察——庄内式土器を中心として——」『紀要Ⅰ』（財）東大阪市文化財協会、一九八五年。
- ④ 寺沢 薫「布留Ⅰ式土器拡散論」『考古学と地域文化』同志社大学考古学シリーズⅢ、同刊行会、一九八七年。なお、寺沢薫による庄内式土器・布留式土器の編年とその内容については、寺沢薫「畿内古式土器の編年と二・三の問題」（矢部遺跡）奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第四九冊、奈良県教育委員会、一九八六年）を参照のこと。
- ⑤ 田崎博之「古墳時代初頭前後の筑前地方」『史淵』第一二〇輯、九州大学文学部、一九八三年。
- ⑥ 溝口孝司「古墳出現前後の土器相——筑前地方を素材として——」『考古学研究』第三五巻第二号、考古学研究会、一九八八年。
- ⑦ 井上裕弘「北部九州における古墳出現期前後の土器群とその背景」『古文化論叢——児島隆人先生喜寿記念論集、一九九一年。』
- ⑧ 久住猛雄「北部九州における庄内式併行期の土器様相」『庄内式土器研究』XIX、庄内式土器研究会、一九九九年。

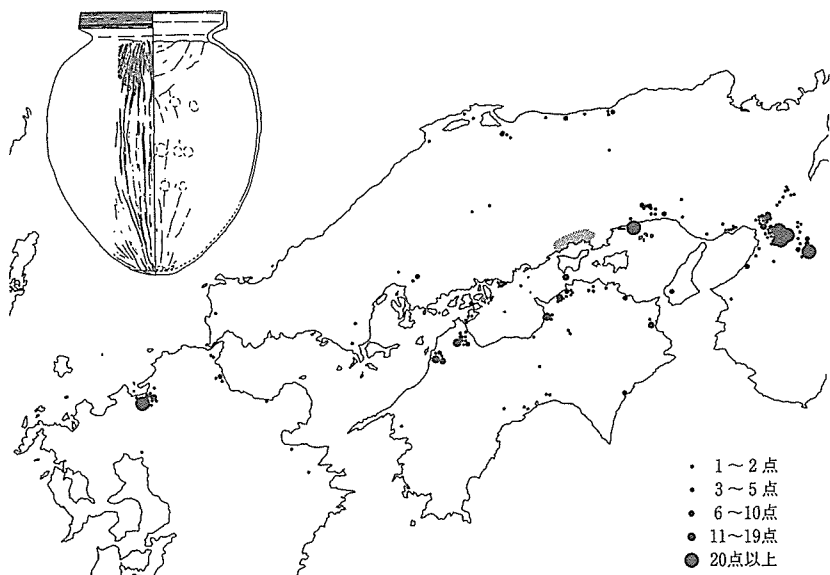
四 土器の移動と物資流通の集落ネットワーク

古墳の出現過程、あるいは古代国家の形成過程において物資流通、とくに遠隔地流通が重要な役割を果たしていたと考える研究者は多い。都出比呂志は、国家形成論において重視すべき要素のひとつとして、「広域の物資流通を掌握して社会を総括する機能の存否またその形成過程の分析」をあげた。^① 前章とも関係の深い課題であるが、こうした議論に対して、土器の移動の研究は、どのようにアプローチしてきたのだろうか。

河内湖南方の中河内地域およびその周辺の当該期遺跡の状況を検討した山田隆一は、弥生時代の集落が解体して新たな集落が出現する現象をとらえ、弥生時代には河川の流域に沿っていくつかの地域ごとに母集落と子集落のまとまりをなしていたものが、弥生時代終末期（庄内式期）になると多数あるいは広大な面積を有する遺跡が密集する状況に変化したとし、大阪府西岩田遺跡、美園遺跡など旧大和川流域に営まれた遺跡、さらに淀川下流域、生駒山西麓の遺跡について、外来系土器のありかた、規模、消長などを整理した。^②

その結果、加美・久宝寺遺跡群と中田遺跡群を二つの大きな核とし、庄内式期初頭から布留式期前半に継続時期の重複する遺跡が密集することを指摘し、本来はこれらを一体的な遺跡群と捉えるのが妥当であるとした。また、外来系土器の搬入が庄内式期の後半に増加し、山陰・吉備・讃岐・阿波といった西方からのものが多く、近江・北陸・東海のものも少数みられることを指摘した。そして、大和川で結ばれた纏向遺跡との関係を重視し、「中河内地域の諸遺跡は西日本各地の「物」の大和盆地東南部地域への流通経路上に機能した流通に関わる一拠点集落群」であると述べ、河内平野における東海系土器のありかたから、「東日本の諸地域から大和盆地東南部にもたらされた「物」は基本的には中河内をはじめ西日本の諸地域には流出しにくい社会状況にあった」と東西双方からの流通の状況を推定した。

さらに、こうした状況は中河内地域の特異な状況ではなく、各地において地域内で傑出した量の外来系土器を出土し



第6図 吉備形甕の分布と吉備形甕（次山2007より編図）

土器実測図は、福岡県比恵遺跡出土（1/8）

「津」としての性格をもつ遺跡がみられるとして、斗西遺跡周辺（近江）、丁・柳ヶ瀬遺跡周辺・長越遺跡周辺（播磨）、津寺遺跡周辺（備中）、黒谷川郡頭遺跡周辺（阿波）、下川津遺跡周辺（讃岐）、西新町遺跡等の博多湾沿岸の諸遺跡（筑前）、諸富町周辺の諸遺跡（肥前）をあげ、「纏向遺跡に搬入された膨大な量の外来系土器を前提とすれば、大和東南部を頂点として旧国単位程度の地域間を繋ぐそれら港湾的機能を有する遺跡がネットワークとして形成された可能性が想定できる。」と結論づけた。

筆者は、吉備形甕の分布を検討し、大和と北部九州を結ぶルートとして博多湾沿岸から周防灘をとり高縄半島の松山平野、今治平野、芸予諸島から備後東南部、吉備、播磨・摂津沿岸をへて大阪湾から河内湖、大和川、大和というルートを推定した（第六図）^③。それぞれの遺跡での出土数は、吉備からの距離に応じて通減するのではなく、一〇点から三〇点以上も出土する遺跡がルート上に点在し、他の八割近くの遺跡が一点から五点程の出土にとどまるのとは際違った違いをみせる。

出土数の多い遺跡・地域（遺跡群）に着目すると、西

から西新町遺跡（筑前）、宮前川遺跡を含む松山平野の遺跡群（伊予）、松木広田遺跡を含む今治平野の遺跡群（伊予）、満越遺跡（備後）、吉備以東では、堂山遺跡（播磨）、揖保川流域など播磨平野の遺跡群（播磨）、六甲山南麓の遺跡群（摂津）、崇禪寺遺跡など猪名川・神崎川下流域の遺跡群（摂津）、西岩田遺跡など大和川下流域の遺跡群（河内）、纏向遺跡（大和）となる。これらの結節点となる遺跡や地域を結ぶかたちで、瀬戸内海の交通路が形成されていたと考えている。

一方、日本列島で出土する朝鮮半島系土器の資料も蓄積され、土器の移動の視点から朝鮮半島との交易形態のありかたについての検討がおこなわれている。

日本列島の縄文時代前期に併行する新石器時代早期の隆起文土器から、統一新羅の滅亡（九三五年）までの朝鮮半島系土器を対象に、日本列島での出土例を概述した白井克也によれば、原三国・三国時代の土器である楽浪土器、三韓土器（馬韓土器、弁・辰韓土器にこれを区分）、古式新羅伽耶陶質土器が、この時期の日本列島にもたらされている。

近年では、長崎県壱岐原の辻遺跡^⑥の継続調査に加え、八〇年代に半島系土器の出土が知られていた福岡県西新町遺跡^⑦において、県立修猷館高校の校舎改築にともなう調査^⑧により多数の堅穴住居跡が検出され、半島系土器の豊富な資料をもたらしした。また、島根県古志本郷遺跡^⑨など出雲地域での出土例が増加したことも注目してよいだろう。

西新町遺跡で出土した半島系土器には、忠清道から全羅道系のもの、全羅南道から慶尚南道系のもの、そして慶尚道系のものといったように、朝鮮半島中南部の複数の地域のものがみられる。朝鮮半島南部のものに加え、西海岸に由来する土器が多数含まれていることは、当該期の対外交渉の相手地域をうかがい知るうえで重要な成果である。この集落では多数の堅穴住居にカマドが付設されることも朝鮮半島から渡来した人々の居住を示す材料となっており、滞在形態の検討がおこなわれている^⑩。さらに、半島系土器やカマドの付設が集落内に限定され、周辺集落への拡散がみられないことから、交易の形態が管理交易にちかいかつたのではないかと想定もある^⑪。

このような資料的蓄積を背景として、朝鮮半島での出土例との対比による系統および交差年代の検討をはじめ、列島内

における半島系土器の分布とその動態についての検討がおこなわれている。

弥生時代中期末から古墳時代前期前半にかけての半島系土器を集成し、時系列的な分布の変化を検討した寺井誠は、半島系土器の出土遺跡が弥生時代後期後半に北部九州を中心に急増するが、以東の地域にも広がること、北部九州内では弥生時代終末期以前は糸島と福岡平野に比較的多くみられるが、古墳時代前期前半には両地域の中に位置する西新町遺跡に集中することなどを指摘した。

他方で、朝鮮半島における当該期の日本列島系土器の出土例も、釜山広域市東萊貝塚などで知られており、相互交渉の検討に材料を加えている。^⑭

さて、白井克也は、土器自体が交易品ではなかったことを前提に、半島系土器のありかたと列島系土器の分布形態から各時期の交易（物資交換）の場を想定し、それぞれ靑島貿易（韓国慶尚南道泗川市靑島遺跡・弥生時代中期前半）、原の辻貿易（弥生時代中期後半～終末期）、博多湾貿易（古墳時代前期）と名付けた。^⑮

久住猛雄は、博多湾沿岸にみられる集落の動向と、半島系土器の時系列的な出土動向を整理し、白井の説に依拠しつつ、原の辻貿易を「原の辻＝三雲貿易」、博多湾貿易を西新町遺跡に集約される段階をもつて前期と後期に分けた。^⑯さらに、古墳時代前期後半に、それまで形成されていたネットワークを支える集落群が衰退し、交易の場も朝鮮半島南部へ移動するとして、「金海貿易」の段階を加えている。このようにして、交易拠点の移動を明らかにするとともに、原の辻＝三雲貿易から博多湾貿易への移行の時期を探った。^⑰同時に、列島各地の土器の博多湾沿岸でのありかたを総合的に検討することにより、当該期における対外的な通交あるいは交易体制の具体像を描いている。

半島系・列島系双方の土器の分布形態からは、当該期に形成された対外的な通交の形態が、博多湾岸に交渉の場をおき九州以東を瀬戸内海沿岸の集落を結ぶネットワークによって支えるものであったことが推定される。この点では、大阪湾周辺を中心に半島系の人とモノの痕跡が顕在化する、古墳時代前期末から中期初頭のありかたとは対照的である。

- ① 都出比呂志「日本古代の国家形成論序説——前方後円墳体制の提唱——」『日本史研究』第三四三号、日本史研究会、一九九一年。
- ② 山田隆一「古墳時代初頭前後の中河内地域——旧大和川流域に立地する遺跡群の枠組みについて——」『弥生文化博物館研究報告』第三集、大阪府立弥生文化博物館、一九九四年。
- ③ 次山 淳「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』第五四巻第三号、考古学研究会、二〇〇七年。
- ④ 白井克也「日本出土の朝鮮産土器・陶器——新石器時代から統一新羅時代まで——」『日本出土の舶載陶磁 朝鮮・渤海・ベトナム・タイ・イスラム』東京国立博物館、二〇〇〇年。
- ⑤ 武末純一「慶尚道の「瓦質土器」と「古式陶質土器」——三韓土器の提唱——」『古文化談叢』第一五集、九州古文化研究会、一九八五年。
- ⑥ 長崎県教育委員会「原の辻遺跡 総集編Ⅰ——平成一六年までの調査成果——」原の辻遺跡調査事務所調査報告書第三〇集、二〇〇五年。
- ⑦ 福岡市教育委員会「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅱ 西新町遺跡」福岡市埋蔵文化財調査報告書第七九集、一九八二年。
- ⑧ 福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅱ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一二次調査報告Ⅰ——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告一、福岡県文化財調査報告書第一五四集、二〇〇〇年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅲ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一二次調査報告Ⅱ——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告二、福岡県文化財調査報告書第一五七集、二〇〇一年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅳ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一三次調査報告Ⅰ——（上・下巻）」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告三、福岡県文化財調査報告書第一六八集、二〇〇二年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅴ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一三次調査報告Ⅱ——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告四、福岡県文化財調査報告書第一七八集、二〇〇三年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅵ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一四・一五次調査報告書——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告五、福岡県文化財調査報告書第二〇〇集、二〇〇五年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅶ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第一七次調査報告書——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告六、福岡県文化財調査報告書第二〇八集、二〇〇六年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅷ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第二〇次調査報告書——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告七、福岡県文化財調査報告書第二一八集、二〇〇八年。福岡県教育委員会「西新町遺跡Ⅸ——福岡県福岡市早良区西新所在西新町遺跡第二二次調査報告書——」県立修猷館高等学校改築事業関係埋蔵文化財調査報告八、福岡県文化財調査報告書第二二一集、二〇〇九年。
- ⑨ 国土交通省中国地方整備局出雲工務事務所・島根県教育委員会「古志本郷遺跡Ⅵ——K区の調査——」斐伊川放水路建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書XⅦ、二〇〇三年。
- ⑩ 武末純一「伽耶と倭の交流 古墳時代前・中期の土器と集落」『国立歴史民俗博物館研究報告』第二一〇集、国立歴史民俗博物館、二〇〇四年。
- ⑪ 吉田東明「西新町遺跡の渡来系遺物とカマド」『九州における渡来人の受容と展開』第八回九州前方後円墳研究会資料集、同実行委員会、二〇〇五年。
- ⑫ 寺井 誠「古墳出現前後の韓半島系土器」『三・四世紀日韓土器の諸問題』釜山考古学研究会・庄内式土器研究会・古代学研究会、二〇〇一年。

- ⑬ 釜山廣域市立博物館福泉分館『釜山の三韓時代 遺蹟と遺物Ⅰ——東萊貝塚——』釜山広域市立福泉分館研究叢書第二冊、一九九七年。

⑭ 井上主税「朝鮮半島南部出土の土師器系土器について」『韓式土器研究Ⅹ』韓式系土器研究会、二〇〇八年。

⑮ 白井克也「靑島貿易と原の辻貿易——粘土帶土器・三韓土器・楽浪土器からみた弥生時代の交易」『弥生時代の交易——モノの動きとその担い手——』第四九回埋蔵文化財研究集会発表要旨集、同実行委員会、二〇〇一年。その後白井は、「弥生・古墳時代における日韓の交易と移住」(第二回東アジア異文化間交流史研究会セミナー報告資料、二〇〇三年)において、弥生時代終末期を「瀬戸内貿易」、古墳時代前期前半を「西新町貿易」、前期後半～中期初頭を「金海湾貿易」とした(久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体——古墳時代初頭前後の対外交易機構——)『考古学研究』第五三巻第四号、考古学研究会、二〇〇七年、三四頁註五参照。

⑯ 久住猛雄「古墳時代初頭前後の博多湾岸遺跡群の歴史的意義」『大和王権と渡来人 三・四世紀の倭人社会』大阪府立弥生文化博物館図録三〇、大阪府立弥生文化博物館、二〇〇四年。

⑰ 久住猛雄「博多湾貿易」の成立と解体——古墳時代初頭前後の対外交易機構——(前掲註⑮)。

おわりに

以上述べてきたように、西日本における古墳出現期の土器の移動の研究は、古墳時代研究の課題との対応をはかりつつ、一九七〇年代には纒向遺跡の調査によって奈良盆地東南部での最初期の前方後円墳に隣接する遺跡のありかたが明らかにとなり、九州そして中四国地域での資料と研究の蓄積をみながら、二〇〇〇年代には福岡県西新町遺跡の調査をはじめとする半島系土器の資料の蓄積によって、朝鮮半島との通交の姿が具体的に見えるようになってきた。特に、国家形成と長距離交易の問題に対しては、半島系土器の分布にもとづく対外交渉のありかたと交易拠点の動向の分析と、北部九州における畿内系土器の受容過程のあとづけが、考古資料にもとづいた議論としての実効性をもつものであることは言うまでもない。また、本稿では十分に論ずることがかなわなかったが、出雲での朝鮮半島系土器のありかたなど、中四国地域の事情を抜きにして、この問題を語ることはできない。

土器の移動の研究は、系統(形式)、時間、空間、数量比の観点から進められてきた。特に系統(形式)の問題について

は、個々の地域での型式学的研究、素地粘土・混和材を含む胎土の研究、小地域性と生産体制の把握が基礎となる。さらに、土器の移動の研究の重要な要素である交差年代による地域間の併行関係の追求などと合わせ、こうした一連の作業は、既知の資料の再検討も含めて今後も繰り返す行われなければならない。特に、分布論によるある時点での評価は、新出土資料による分布範囲の拡大や、分布範囲内での多寡、粗密の理解の逆転などをもたらし、大きく変わることがあり得るからである。それぞれの地域における地域研究が、一層深められていくことが何よりも大切である。

插图出典

第一図 大参義一「弥生式土器から土師器へ——東海地方西部の場合——」『名古屋大学文学部研究論集XⅦ』史学一六、名古屋大学文学部、一九六八年。

第二図 岡山県教育委員会他『百間川原尾島遺跡三 旭川放水路（百間川）改修工事に伴う発掘調査Ⅹ』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告八八、一九九四年。

第三図 大久保徹也「高松平野香東川下流域産土器の生産と流通」『初期古墳と大和の考古学』学生社、二〇〇三年。

第四図 関川尚功「土器の移動に関する問題」『縦向』桜井市教育委員会、一九七六年。

第五図 阿部嗣治「土器の移動に関する一考察——庄内式土器を中心として——」『紀要Ⅰ』（財）東大阪市文化財協会、一九八五年。

第六図 次山 淳「古墳時代初頭の瀬戸内海ルートをめぐる土器と交流」『考古学研究』第五四卷第三号、考古学研究会、二〇〇七年。

Society during the Initial Stage of the Kofun Period and the Movement of Pottery

by

TSUGIYAMA Jun

The movement of pottery after the Jōmon period has been recognized as having taken several forms, among these, the movement of pottery during the initial stage of the Kofun period has been characterized by the movement of ceramic vessels over broad expanses and great distances transcending stylistic spheres in various areas of the Japanese archipelago under a system of production prior to the appearance of Sue ware that did not achieve wide distribution. Moreover, it was not at all rare for great alterations in style of the pottery to take place at the destinations of distribution. This movement of pottery reflected the circulation of people and goods as well as the flow of information; and it has become a source for consideration of the initial appearance of the *kofun* (burial mounds), their development, and wide-ranging distribution system. In this article, I make a systematic examination of the current state and issues facing the field from the point of view of the system of pottery production, the two-way mutual movement of pottery in the Kinai region (the movement of pottery into the Kinai region and the movement of pottery from the Kinai region), the system of distribution and the networks of settlements that can be interpreted from the movement of pottery in regard to society during the period of the initial appearance of the *kofun*, using sources primarily from western Japan.

In regard to the system of pottery production, it has been confirmed that from the late Yayoi period through its final stage, pottery production, which had previously been self-sufficient for each settlement, was augmented by production on multiple levels on the basis of the concentration of production due to regional division of labor in various places in western Japan such as Sanuki, Awa, Kibi, Kawachi, and Yamato. The pottery of each of these regions used characteristic clay paste, coloring, techniques, and shapes; and in recent years the location of production and range of supply has been examined on the basis of the ratios of transported pottery to local pottery

found in archaeological sites, and thus the movement within the range of supply and the situation in which they were transported outside that range is becoming clear. In regard to the transport outside a stylistic sphere, relations among various regions have been deduced from the examination of the route of movement, changes in the chronology of their transport, regional differences, and alteration of the direction in the movements.

The active inter-regional distribution of pottery over a wide range has been thought to be one factor that brought about Kofun-period society, which was characterized by the appearance of the keyhole-shaped tumuli. It was surmised in particular from the Makimuku site in Nara prefecture, where early *kofun* such as the Hashihaka Kofun tumulus was constructed, that the fact that various styles of pottery, which had been transported from a wide area from the Kantô region to the western Seto Inland Sea, occupied up to 15% of the total, indicated the character of the central Kinai region, and it was also surmised that there were multiple causes such as the movement of people who were employed in the engineering and construction of the tumuli in addition to trade activities.

In contrast, in the study of the widespread movement of Kinai-area pottery research has been conducted chiefly into their distribution and trends as well as in studies on localised character in the regions where they were received. In the latter, research into the process of reception within the region and an attempt to grasp the trends of local groups are proceeding on the basis of an analysis of the relationship between local style and Kinai style pottery. The phenomenon of the shift in the style of pottery across a wide area of northern Kyûshû from Hakata Bay to the Ariake Sea to the Kinai style has been recognized, and many have argued that this location was also the entryway for interchange with China and the Korean peninsula as well as linking it to the advance of groups from Kinai.

It is thought that distribution of necessary materials such as iron across long distances played an important role in the formation of Kofun-period society. The study of the movement of pottery indicates this widespread trade was linked and supported by a network of sites that have been recognized as active in this exchange and from which many examples of transported pottery have been excavated and helps us identify distribution routes. In addition, an analysis of the movement of pottery from the Korean peninsula has clarified the character and form of trade during this period, including the fact that the coast of Hakata Bay was the site of negotiation in foreign relations.

The study of the movement of pottery has advanced from the viewpoint of lineages, forms, chronology, spatial characteristics and quantity ratios. Particularly in regard to the issue of lineages (forms), typological studies of each region, studies of basic materials including the clay and various admixture fillers, and an understanding of the local character and systems of production have formed a foundation. Moreover, in combination with the pursuit of an understanding of the parallel relationship between regions on the basis of their cross-dating, which is an important element in the study of the movement of pottery, this series of intellectual operations, including a re-examination of previously known findings, must be repeated continuously in the future.

'Li Veniciani non li peregrini portano gratis, ne per amor de Dio':
The Patrons of the Galleys for Pilgrimage in the Middle Ages

by

SAKURAI Yasuto

It has, of course, been the holiest of deeds for Christians to visit the Holy Land from ancient times, and we may regard it as the holiest journey without hesitation. But, we must not forget that the accomplishing pilgrims' purpose would have been difficult without the support of others. During what is called 'the golden age of pilgrimage,' that is from 1333 to 1530, the leading figures conveying pilgrims were the patrons of the Venetian galleys used for pilgrimage. Though it is both interesting and worthwhile to focus on these figures because we can see another side of 'the holiest journey,' but we can name only three scholars who paid attention to them, R. Röhrich, M. Newett and J. Scottas.

Among them, Newett's research deserves special mention. He researched the system of the galleys for pilgrimage and the changes in it nearly completely by analyzing almost all extant Venetian documents. On the other hand, analysis of the pilgrims' texts has not been done sufficiently, though it is true that Röhrich and Scottas referred to them. Nevertheless, this problem has continued to be overlooked for about one century.

Given the above, the aim of this paper is to analyze all documents of the